

■会議報告

日本放射光学会若手部会設立について

和達大樹	(東京大学物性研究所)
片山哲夫	(高輝度光科学研究センター)
永村直佳	(物質・材料研究機構)
堀川裕加	(山口大創成科学研究科)
山崎裕一	(物質・材料研究機構)
山田悠介	(高エネルギー加速器研究機構)

このたびは、2017年4月に開催された評議員会において、日本放射光学会若手部会の設立を承認していただきました。そして、放射光学会のwebサイト内でも <http://www.jsrr.jp/wakatebukai/wakatebukai-j.html> のページで紹介していただいています。同ページ内での設立要望書でも示しましたが、学位取得後から、39歳以下までの独立研究者を目指す(あるいは独立したばかりの)若手同士の交流・研究などの情報交換・人脈づくりを目指すことを第一の趣旨としています。これまでの具体的な活動としては、現在まで若手によるミニ研究会の開催、他学会の若手部会との交流などを進めております。下記のような3つのイベントについて紹介させていただきます。

(1) 若手によるミニ研究会の開催

まだ上記のように正式に承認を受ける前ですが、若手としてまずは研究会を開催しようと考え、2016年9月7日(水)の9:30-12:15に第一回放射光学会若手有志研究会「太陽電池の作製と分光」を東京大学本郷キャンパスで行いました。まずSession 1(研究紹介)として太陽電池について、嘉治寿彦先生(東京農工大)、櫻井岳暁先生(筑波大)、小鍋哲先生(東京理科大)にご講演いただきました。嘉治先生は太陽電池の紹介から有機薄膜の結晶化などについてまで広い範囲をお話してくださいました。その後、櫻井先生には放射光を使った太陽電池の研究について、小鍋先生には新奇な光電・熱電変換に関する理論研究についてご紹介いただきました。講師の先生方の熱意と会場からの熱心な質問のため、35-40分程度の講演時間ではやや短く感じられるほどでした。二回目以降のプログラム編成に活かしていきたいと思います。

Session 2(情報交換)として若手のキャリア問題について取り上げました。このように研究そのものではなく、若手の悩みなどについても取り上げることを今後の研究会の特徴としようかと考えております。初回としては、欧米では普通に行われており、日本でも最近推進されている「テニュアトラック制度」について取り上げました。テニュア(tenure)という単語は、教職員の終身雇用資格を意味するものであり、研究・学問の自由と同時に経済的な安

定を保証してくれるものと言えます。欧米の若手研究者はまずはこの取得を目指しており、日本でもこのような考え方が広がっていると思われます。テニュアトラック制度は、Assistant professorとして独立研究室を持ち、着任から6年目あたりにテニュアの審査がありAssociate professorへの昇進を目指す、という制度です。研究会では、和達から米国Stanford大学のテニュアトラックAssistant Professorに公募してInterviewに招かれた件について紹介し、そしてSession 1でも講演なさった嘉治先生からご自身も就いている東京農工大におけるテニュアトラック制度について、お話いただきました。嘉治先生のご講演から、若手のうちにいったん独立したAssistant professorとして研究室が持てることにより、自分の責任で研究を進めるという研究者としての自覚を早い段階から持つ大きなメリットを感じました。日本では助教をAssistant Professorと訳すことが多いですが、上記のAssistant Professorとはかなりの差があると感じます。キャリアパスには正解はないと思いますが、上記のようなテニュアトラック制度などは、若手が研究者人生を考えるにあたり、重要なものであると感じました。

ご講演いただいた先生方のお陰で非常に盛り上がった研究会となり、第一回として成功を感じました。参加者は全体で18名程度でしたが、第二回以降さらなる宣伝活動を行い、研究会を盛り上げていきたいと思っています。



第一回放射光学会若手有志研究会での会場の様子。

第二回目は9月13日(水)の午前中、第一回目と同じ本郷キャンパスで行う予定です。テーマは Session 1 として「マテリアルズインフォマティクスと分光」、Session 2 としてキャリア問題について取り上げます。

(2) 第2回若手科学者サミットへの参加

他学会の若手部会との交流も、本若手研究会の重要な活動と考えています。そのため、和達が代表して日本学術会議若手アカデミー若手科学者ネットワーク分科会の主催する第2回若手科学者サミットに参加し、ポスター発表を行いました。これは2017年6月2日の午後に東京の日本学術会議講堂で開催されました。第1部では、若手研究者による研究報告ということで、日本教育行政学会若手ネットワーク、日本放射学会若手の会、日本水産学会若手の会、日本気象学会人材育成・男女共同参画委員会、Japan-YWP (Young Water Professionals) の5つの会より若手研究者の講演が行われました。普段聞くことのない他分野の先生方の講演として大変興味深く、特に日本教育行政学会若手ネットワークの榎景子先生(神戸大学)は、教育政策として米国シカゴを調査したものであったことや、スライドではなく配布資料による発表であった点など、内容的にも発表方法にも文理の違いなどが感じられました。

そして第2部としてポスターセッションが行われ、我々の日本放射光学会若手部会のほかに、日本基礎心理学会若手研究者特別委員会、資源・素材若手ネットワーク、日本産業衛生学会生涯教育委員会若手研究者の会、疫学の未来を語る若手の会、化学工学会九州支部若手エンジニアリング連絡会、日本心理学会若手の会、ビーム物理研究会・若手の会、日本放射学会若手の会、溶接学会若手会員の会、日本気象学会人材育成・男女共同参画委員会・気象気候若手研究者交流会、日本サンゴ礁学会若手の会、水産学若手の会、Japan-YWP、次世代医工学研究会、日本顔学会若手交流会と計16件のポスター発表がありました。我々の発表内容に関しては、世界と日本における放射光施設の分布や、次の放射光施設の建設計画などが特に関心を集めました。また、東大物性研は播磨分室としてSPring-8のBL07LSUに常駐していることから、放射光施設における大学院教育の進め方や、放射光施設での研究活動と大学教員としての授業や運営活動との両立の方法などもよく質問を受けました。第3部はパネルディスカッションで、テーマは「若手研究者と研究費」でした。この部分は残念ながら私は時間の都合で参加できませんでした。

このように他学会の若手部会との交流から多く学ぶことができ、また若手部会の方向性としても考える点がありました。若手科学者サミットは「若手」という中で特に、大学などの若手教員を主なターゲットとしていると感じまし



第2回若手科学者サミットのポスター会場の様子。

た。その一方で「若手」というと、大学院生、ポスドク、助教も含まれますし、放射光学会では特に放射光施設と大学にも色々な違いがあると思われます。若手部会の活動としては、当初は「独立研究者を目指す(あるいは独立したばかりの)若手」というターゲットを考えていたましたが、さらに若手である大学院生やポスドクなどにも焦点を当てたイベントなども必要と感じました。

また、「若手」の年齢の定義も学会の若手部会ごとに異なるようで、実際には40-50代の先生が多くかかわっている若手部会もあるようでした。数字で定義することには賛否ありそうですが、会の運営をベテランの先生に頼るようでは本末転倒ですので、放射光学会においては39歳以下が主体となって行うという当初の方針でいいのではないかと思います。

(3) 日本放射光学会第9回若手研究会

若手部会の設立メンバーである和達と片山に加え、上村洋平(分子科学研究所)、深谷亮(高エネルギー加速器研究機構)の4名が世話人として提案した日本放射光学会第9回若手研究会「最先端のパルス光で観る超高速科学」が無事採択されました。採択して下さった先生方に感謝いたします。9月11日(月)~9月12日(火)に東京大学本郷キャンパスで行い、SPring-8にもTV会議で中継します。

若手研究会は昨年度が提案0件、今年度もこの1件ということで、若手研究者が様々な活動で忙しい中で研究会を提案し開催することの難しさを感じられます。若手部会としても部会メンバーなどが世話人として提案することを今後、積極的に推進しサポートしたいと考えています。

このように若手部会として活動を開始したところです。今後はミニ研究会の開催、他学会の若手部会との交流を進めると同時に、それ以外でも若手研究者にプラスとなる活動を行っていきたいと考えておりますので、ぜひご理解とご支援といただければと思いました。どうぞよろしくお願いたします。